

母親の育児不安とソーシャルサポート

～母親の語りに見られるローカルな親になるプロセスとソーシャルサポートの意義～

寺 見 陽 子

(神戸親和女子大学)

【目的】南と筆者(2002a・b; 2003a・b)は、これまで因子分析と共分散構造分析を用いて、母親の育児不安因子の構造と母親の属性、生育暦、母親自身の愛着傾向及びソーシャルサポートとの関連を検討してきた。育児ストレス要因は、育児忌避感、拘束感、当惑感の3因子が抽出され、それらは、母親の学歴、就労経験、生育暦、住居形態、夫の職業、妊娠・出産の経過と出産時の母子の状態、子どもとの相性、子育ての成功感、さらに母親自身の愛着のあり方と関連していた。高年齢の母親ほど、就労している母親ほど充実感があり、アンビパレント或いは不安・回避的な愛着を持つ母親は育児ストレスが高く、自立的な愛着の母親は負担感が低かった。また生育過程で母親自身が親から受けた非受容感が親密不安と連鎖し、親密不安が育児の拘束感に繋がって、さらに当惑感を生み出していることが明らかになった。ソーシャルサポートについては、年齢が低いこどもを持つ母親、就労している母親が社会的支援の不足を感じ、自立的な愛着の母親は隣人からのサポートを得ていた。また夫の無理解、サポートの低さは母親の欲求不満を高めていた。Mikulincer&Florian(1998)によれば、母親の愛着のあり様によって、育児ストレスの感じ方や子育てに伴うストレス状況下において他者のサポートを求める傾向に差が見られるという。これは育児不安の軽減のために求められるサポートの志向性は、個人的状況に規定されることを示唆している。つまり個人的状況と不安要因及び求められたソーシャルサポートの意義を個別的に捉え質的意義を問い直す必要がある。本研究では、母親の出産・育児状況と育児不安要因及び求められたソーシャルサポートの意義にを質的に考察する。

【方法】育児講座に継続的に参加している母親を対象に24名の母親にインタビューを実施した。インタビュー内容は、就労、妊娠時・妊娠期間の過ごし方、母親観・育児観・子ども観、育児への不安、育児のし方、夫の協力、サポート体制、育児講座などへの参加と効果、子どもの教育などを設けたが、エスノグラフィ的なやり方で、基本的には自由に話してもらった。分析に際してはトランスクリプトを

作成し、語りに見られる言説を検討した。

【結果及び考察】KS: 保育所で3年間働き、その後6年早期教育の幼児教育関連の会社で勤める。結婚してずっと勤めるつもりでいたので、産休の段取りを考えた。妊娠して嬉しかったが、次に仕事をどうしようかと思い、マタニティライフを楽しむ感じはなかった。お腹をどこかににおいて走っていたという衝動に駆られた。産休を取ってから如何してたかあまり覚えていない。ただ時間が過ぎただけ。生まれたときは可愛いなと思い、育児の間、子どものいる友達と遊べるのが楽しかった。ブルーになることはなく、赤ちゃん中心の生活になった。やさしくて子どもと一緒に楽しんで生活できるような母親になりたいと思った。元気で物怖じしない子になって欲しいと思ったが、内弁慶になってしまった。近くに子どもがいないので公園デビューができなかった。2人で孤独になってもいけないと思い、育児講座に入った。育児の仕方については、とにかく雑誌を読んだ。間違っではいけないというのがどこかにあって、子育て支援センター、保育所の園庭開放、子育てディスカッション…講座があれば全部行った。大阪や京都にも言った。二人でいるのが不安だったし、夫はプロだからと手を貸してくれなかったので、全部一人でやらなければ、間違っではいけないと追い詰められていた。毎日子どもと遊べるところがあればいいなと思った。いざというときには実家が近かったので助けてもらった。育児講座では、私自身が楽しかったし、いろんなお母さんの意見が聞けるし、私より上の子どもを持つお母さんの話が聞けるのがとてもよかった。仕事を再開した時は、むしろ気分転換になった。リフレッシュステイのある幼稚園と祖母に預けてできる仕事の勤務体制を考えた。

<考察>育児は自己実現の一部として計画的に考えられる。仕事が保育関係であったために「失敗できない」というプレッシャーになる。また回りに子どもがいないために、孤独な子育て(一般的な通念から)になることを不安に感じ、育児講座や園庭開放に出かける。同じ子どもを持つ母親、先輩の母親が癒しになる。仕事によって気持ちが切り替えられる。

仕事の再開に預り保育と祖母の援助が支えになる。
YM：専門学校を出て、7年仕事をする。その間結婚をして、4年目に妊娠したが、生まれる2ヶ月前まで仕事を続けた。計画出産で、子どもができたならやめようと思っていた。妊娠中は順調で、生まれたときは嬉しかった。胎教セミナーに言ったり育児書を読んだり熱心だった。出産は初めてということもあってすごく怖かった。妊娠後期に私がアトピーになって、母子同室性の産院にかわった。産後少しマニティブルーになるが、子どもに対してはなかった。まあ嬉しい気持ちが大きかった。ずっと早期教育にはまっていたので、早期教育をすることが子どもにとって一番いいことだと思っていた。ある公民館の育児講座で、「早期教育？」といわれ、その頃子どもがだんだん動き回るようになっていて、じっと座ってフラッシュカードを見せたりすることに疑問を感じるようになって止めた。気が付いてよかった。その時々で困ったことはあったが、その悩みをクリアするとちょっと余裕ができ、人間的に大きくなってくると感じる。悩みは友達に相談した。近くに母親がいたが、近所の人頼りになった。主人は、家事にも育児にもあまり協力的でなかった。主人が子どもと一緒に出かけるとなると準備が大変で、自分と子どもとだけのほうが楽だった。育児講座への参加は主人の転勤がきっかけ。見知らぬ土地で何とか参加できるものはないかと探した。子どもの様子が見られたり、先生のアドバイス、特に他のお母さんからの意見が参考になった。みんな同じ悩みがあるんだ、こんな見方もあるんだと、講座で話を聞くと安心できたし、自分の疑問に納得が生まれた。いろいろ話せる友達ができ、近所の人とは違う付き合いができた。育児サークル、児童館、保育園の園庭開放にもでかけた。晴れている日はとにかく出かけた。子育ては自分の成長にとって価値のあることだと思う。子どもが幼稚園に入ったらもう一度働きたい。私自身、ほったらかしにして育てられた。臍面でもあまり細かく言われなかった。のびのびはしていたかもしれないがもう少し教育してくれたらよかったのと思う。子どもにしてやりたいが自分がそうやって育てられていないからなかなかできない。
<考察>自分があまりかまわれることなく育ちもっと教育して欲しかった思いがあり、早期教育や様々なところに出かけることを育児と考える。夫の転勤と育児への非協力がそれに拍車をかける。近所の人、育児講座等での他の母親との関わりが育児の参考に

なり、そのかわり通して自己成長を実感する。
SF：自分自身2人兄妹で、兄が精神的に問題を抱えていたために、親に心配をかけてはいけないとおもって育った。家に帰りたくなくてずっと外で遊んでいた。兄のこともあったけど、祖父がとても怖い人だったので家があまり好きではなかった。子育てって、最初にボタンを掛け違えると大変だなと実感している。そのとき修正する時期はあったはずだが、ずーっとほったらかしにしていたから(兄のことを)かわいそうだと思う。私の原点は、自分の育った家をベースにしてそうならないためにはどういう風に子育てしていったらいいのかという事からスタートしている。私は事務を新人研修の仕事を8年間して、結婚は遅かった。妊娠を知ったときは嬉しかった。週末ごとに母の見舞いと仕事でんやわんやで、余裕がなかった。兄のことがあったので、子どもがきたら怖いという気持ちがあり、本当に可愛がれるだろうかと不安だった。以外にもその怖さは実際にはなく、子どもを抱いたときには母の気持ちがわかった。それまで母にはいろいろ思いがあったが、母も私のことを大事に思ってくれていたんだと、ありがたさを感じた。兄のことの不安があったが、主人と一緒に安心してすることができるようになった。話をちゃんと聞いてくれるので。両親は悩みが大きすぎて、人の話を聞ける状態ではなかった。子どもには自分の力で生きていける人になって欲しい。自分が好きで楽しいなと思える大人になって人生って面白いねと生きることによって希望をもって欲しい。私も、子どもだけしか見えない親になんてくないので、子育てで自分を置いていかないようにしたい。友達のお母さんが上手に子どもを笑わせているのを見て落ち込んでしまい、これではいけないとおもってあちこち出かけ、育児講座にも参加するようになった。育児の援助は、主人が一番である。
<考察>自分の成育過程における家庭への不安感が自己の不安感を高める。子どもにも自分にも非受容感への懸念はあり、それを回避かわりが展開される。そうした中で、夫の存在が大きな位置を占める。
【まとめ】母親の語りには、個人のライフストーリーに埋め込まれたローカルな親になるプロセスを読み取ることができる。育児ストレスは、筆者のこれまでの研究を裏付けるものではあったが、母親の置かれている状況によって要因構造はかなり異なり、更なる検討を要する。また、育児におけるソーシャルサポートは個別的な意義があることも示唆された。